

「原子カムラ」の境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行

第1回業務推進全体会合

逐語録

(木村^浩) 時間になりましたので、平成26年度の第1回業務推進全体会合を始めたいと思います。

それでは、資料番号を振っていききたいと思います。まず議事次第があります。1-0をお願いします。次に、昨年度の報告書の概略があります。1-1をお願いします。次に、業務計画書（一部抜粋）があります。1-2です。次に、今年度のメンバー一覧があります。1-3をお願いします。最後に、冊子体の資料があります。これは昨年度の報告書の一部です。1-4をお願いします。今日は4種類の資料で準備をしております。いかがでしょうか。

本日の流れですけれども、最初に、昨年度の簡単な報告と、今年度の計画についてお話ししたいと思います。次に、昨年度のインタビューがどのように分析されたのかということをお話ししていきたいと思います。

3. その他

(木村^浩) 最初に、その他の部分を確認していきたいと思います。

ホームページは現在も更新中で、昨年度の会議の議事録がほとんどアップされた状態になっています。社会調査の情報も公開されています。ご参照いただければと思います。

今年度は、全体会合を5回予定しています。

第1回は、今年度の業務の確認がメインのトピックになります。

今年度のフォーラムは、5月31日から隔週土曜日で全5回を計画しています。7月の終わりにフォーラムが終わりますので、その後第2回全体会合を行って、フォーラムの報告をしたいと思っています。

フォーラムが終わった後に、フォーラムの参加者にインタビューを行うことになっています。第3回は、10月くらいに、その結果の報告ができればと思っています。

また、今年度はこのプロジェクト全体のシンポジウムを企画しています。日程はまだ決めていませんけれども、1月から3月の間のどこかで時間を取ってやりたいと思っています。第4回では、それに関して話し合いたいと思います。

第5回は、全体のとりまとめということで、2～3月に開催する予定です。

特に第2回、第3回については早めに日程調整をさせていただきたいと思います。後ほど皆さんにメールをお送りしたいと思いますので、お願いします。

ということで、先に事務連絡をしましたが、何かございますか？

1. 平成 25 年度業務報告、平成 26 年度の計画について

(木村_浩) よろしければ、次の議題に移りたいと思います。まずは資料 1-1 をご覧ください。昨年度の報告書の概略になります。

平成 24 年度は、報告書と概要版の 2 種類を作る必要があったので、この場では皆さんに概要版をお配りしてお話をしたのですが、平成 25 年度は、文科省から、概要版は作らなくてよいという指示がありました。その代わりに、概略を目次の後につけなさいということで、2~3 ページくらいの概略をつけることになりました。報告書本体は皆さんにすでに送っていますので、そちらを見ていただければと思います。

では、概略に従って、昨年度の業務を振り返りたいと思います。

研究の背景は省略します。

昨年度の目的と実施内容。平成 24 年度に実施したコミュニケーション・フィールドに関する既往研究の整理と、コミュニケーション・フィールド「フォーラム」の考案を受けて、平成 25 年度の事業は、フォーラムの実施と効果検証、再設計が目的となる、ということで、それを粛々とやったということになります。

成果。平成 25 年 5 月から 7 月にかけて、全 5 回の第 1 期フォーラムを実施した。その結果は、全てホームページに公開しているということです。また、フォーラムの効果測定でインタビューを行っています。今日は、インタビューの結果を整理したものをメインの話題として提供したいと思います。2~3 ページには、フォーラムを開催したということ、アンケートの結果、インタビューの結果がさっと書いてありますので、あとで読んでいただければと思います。

4 ページ目には、第 1 期のフォーラムのまとめを受けて、第 2 期フォーラムの再設計と準備に取り掛かったと書かれています。再設計においては、フォーラムの「システム化」を念頭において、フォーラムの要件の整理と、それに基づいたフォーラムの準備を行っている。

そして、社会調査を実施しましたが、ここではその結果は省略しています。あくまでも社会調査はフォーラムの準備の一環として記載しているということです。報告書本体には、前回お示ししましたような詳細な分析結果が掲載されていますので、そちらもご覧いただければと思います。

最後に、次年度の見通しを書いています。平成 25 年度で第 2 期フォーラムについての再設計および準備を行った。平成 26 年度は、第 2 期フォーラムを試行し、アンケートやインタビューによる効果測定を経て、コミュニケーションや信頼に関するダイナミズムを明らかにする。特に、第 1 期フォーラムで達成できていないコミュニケーションへのプロセスに関する知見も拡充する。この辺りは、この後竹中君に紹介してもらいますけれども、イ

インタビューの結果として、お互いを「尊重」することはある程度できただろうと。しかし、相互の変容を含めた「コミュニケーション」までできていたかという点、少し自信がない、という結果が出てきています。

また、本研究業務の最終年度となる平成 26 年度は、フォーラムというコミュニケーションの仕組みを「システム化」する作業を行うことによって、原子力に限らず、同様な課題を抱える社会問題に適用可能なコミュニケーション・システムの開発を目指す、ということで、新しい仕組みを入れるというよりは、昨年度の知見を受けて、よりシステムティックにフォーラムを構成して、それを検証することに重点をおきたいと考えています。

以上のように昨年度の報告書の概略を書かせていただいています。何かご意見などございましたら、この場でいただきたいと思っております。今年度の業務にも反映できますし、あとは、今年度は最終年度ですので、今年度の報告書に加えて、プロジェクト全体としてのまとめが求められると思うので、そういうところにも活かせるのではないかと思います。いかがでしょうか。

—— 「フォーラムのシステム化」がキーワードになっていると思うのですが、もう少し具体的に説明していただけるとありがたいです。システム化して、誰でも行えるようにする、いわゆるマニュアル化みたいなイメージですか？

(木村 浩) いろいろなレベルがあるとは思いますが、その中でも。

まずは、こういう課題に対して、こういう仕組みを使うと、こういう効果が出ます、という一連のセットです。課題を明確化したときに、そこにこういう処方箋を加えると、こういう結果が出ます、というセットが、まずは大きなレベルでのシステム化といえます。

さらには、そのシステムの要件を満たすためには、どういう要素を入れればいいのか、というデザインのほうのシステム化も考えています。昨年度は、この辺りまで検討して、報告書にまとめています。本日の後半で、少しお話ができると思います。

実際にマニュアルに落とす作業は、これからやろうとしているところです。どういう機能が必要かということ、それに対する注意事項の整理、くらいまではできてきているので、すけれども、そこから先の、読んだらそれができるところまで落とし込めるかどうかは、今年のまとめくらいのレベルになるのではないかと考えています。

—— 臨機応変に柔軟性を持って進めるのか、それとも、カチッとしたものとするのか、そのバランスが難しいと思うのです。今の木村先生のお話だと、カチッとしたものには重点を置かれていますよね？ 臨機応変に変えるのもシステムといえるのかもしれませんが。

(木村 浩) 臨機応変に変えるべきところは、「臨機応変に変えるべき」と書きこんであります。でも、全般としては、「このようなカチッとしたものを作っておくと、こういう効果

が得られます」ということになります。臨機応変ばかりにしていると、効果もなくなってしまいますので。やはりある程度カチツとしていて、一定の効果が得られるものを考えているということです。

—— 「フォーラム」は、基本的には討論型、熟慮型調査の一環だと思うのです。それを踏まえて、何点かコメントしたいと思います。

その手の熟慮型の取り組みの結果として、誤解が解けた、あるいは、双方に信頼が生まれたというものがありますが、それはフォーラムでも得られています。これは非常に大きな成果だと思います。ただ、2時間目、3時間目も同じことをやるのだろうか、というのが1つ目のコメントです。

それから、この手の DP において一番注意すべきことは、標準的な市民を選ばなければいけないということです。今回のフォーラムは、標準的な市民のサンプリングに失敗している可能性があります。これは危機的な状況だと思います。

それから、民主党政権時代に討論型世論調査が行われましたが、その結果とフォーラムの結果はまったく逆になっています。あちらは、DP をした結果、原子力に対する否定的な意見が増えた。フォーラムでは原子力に対する肯定的な意見が増えた。なぜそのような差が出たのか。もちろん、あちらは原子力全体を扱って、こちらは原子カムラを扱っていますから、対象が違うのですが、ここもひとつのポイントだろうと思います。

それから、根本的な話として、そもそも世論調査を続けるためにフォーラムを設計した、といういきさつがあったと思います。その話をどのように処理するのか、詰めておく必要があると思います。

(木村^浩) 最後の話に関しては、このプロジェクトはフォーラムの実施がメインですので、逆に、それに世論調査が乗っかっているという形になります。

参加者選定に関しては、昨年度の後にも言いましたけれども、原子力に対する関心が低下していて、公募をしても参加者が見込めないという状況にあります。なので、今回は、標準的な市民を選択するための統計的なデータのひとつとして、社会調査結果を用いる。その意見分布に割り当てて、運営側である程度参加者をピックアップする。運営側が頼んだ人たちなのだけれども、ひとつの標準形に収まったような人たちが集まるようにします、というやり方でやるしかないということで、設計を変えています。ですから、システム化においては、参加者をどのように選択するのかということもきちんと決めておかなければなりません。

民主党の討論型世論調査とフォーラムとで結果が異なるのは、おそらく、構成員の差も大きいと思います。フォーラムは、市民と専門家が同数いて、コミュニケーションをするというスタイルなので、向こうとは異なる意識変化があったのだろうと思います。

—— フォーラムの目的を誤解されているようなので、少しコメントします。民主党は、討論型世論調査によって世論を測定しようとした。フォーラムは、それに代わるひとつの手法、ではありません。10人のフォーラムの結果によって世論を推し測ろう、という意図は、まったくこの研究の目的にはないのです。だから、民主党政権時代の討論型世論調査とこのフォーラムを比較することにはまったく意味がないと思います。

—— いや、そういうことを言っているわけではありません。熟慮型の調査というのは、世論調査をするためのものではなくて、市民との対話が目的ですから。

—— リスクコミュニケーションのひとつの試みだと私は理解しています。

(木村_浩) もう少し詳しく説明しますと、資料1-4の32、33ページに、システム化にあたって、今現在考えている要素が整理されています。参加者選定に関しては、参加者の公平感を確保するために選定をしているという位置づけにしています。どのように参加者が選ばれたのかを明確に示すことで、運営陣自体を信頼できる。また、参加者自体が、そういう枠組みでのコミュニケーションをやろうとしているのか、ということが見える、と思っています。

第1期フォーラムはDPの延長として設計していたのですが、必ずしもそこに注目しなくても、やりたいことを明確にして、それを達成できる手段として提案していくのであれば、参加者の選定の方法もいろいろあるのではないかと。そのときに求めるべき要件を整理していくと、このようになるのではないかと、という形です。

第1期フォーラムで何がうまくいったのか。何がうまくいかなかったのか。第2期では、第1期で達成できなかった部分の検証と、さらに野心的なところまで踏み込めるかどうかの検証も併せて行いたいと思っています。

—— フォーラムが市民との熟慮がメインであるということは、私も十分認識しております。それから、先ほどの民主党の話は、主催者側の意図が被調査側に介入したのではないかと個人的には思っています。民主党がやった場合と、原子カムラである私たち学会がやった場合では、少し差が出るのだろう、ということ言いたかったです。

(木村_浩) なるほど。それはありえますね。

—— それはその通りですね。

DPは、世論調査でも仲良くする機会でもなくて、意思決定のツールです。ポーリングに惑わされると間違えてしまいますから、そこははっきりしたいと思います。

それから、民主党と我々の違いは、今おっしゃられた通りだと思います。それに加え、

木村先生がおっしゃったように、参加者に原子力学会員がいたということ。それから、対象が、民主党は「原子力を行う」という行為でしたが、フォーラムは「原子力に携わる人」でしょう。人に対する批判は少なくなるのです。その3つが原因でしょう。

—— 一般の人にも分かりやすく、かつ、あまり文字数が多くない、一目瞭然で分かるような、「フォーラムの目的」があるといいですね。

(木村_浩) 今、それを苦勞して作っているところです。フォーラム研究会で、標語みたいにもいつも貼っておけるものを作っておきましょうという話があって、その案を作ったのですが、なかなか難しく、またフォーラム研究会でご意見をいただきたいと思いません。

—— ご指摘があったように、討論型世論調査のような手法と我々のフォーラムはまったく別物なのだ、ということが一目で分かるようなものがあるといいですね。

(竹中) それについて、平成24年度の報告書で少し触れたような気がします。今までやられてきたコミュニケーション・フィールドを5段階くらいに分けたときに、DPというのはかなり前のほうの段階にあるものだと。今回我々が取り組んでいるのは、その段階ではない、ということを書いていたような気がします。

(木村_浩) プロジェクト全体のまとめを作るときには、その点ももう一度考察に加えたほうがいいでしょう。おそらく、その辺を見返して、報告書をまとめていくことになると思います。

—— 他の取り組みと比べて、我々のフォーラムが際立つ形にしたほうがいいですね。

(木村_浩) そういうことです。

それから、「こういうことをやれば、こういう効果があります」ということを、ある程度しっかりと決めておきたい。仲良くなりましたとか、信頼がちょっと上がりましたということではなくて、その中身はどうか、ということまで踏み込んだ効果として提示しておきたい。今回、インタビューの分析を基に、「コミュニケーションが取れるようになるまでのプロセス」という仮説を作ってみました。それを基に、コミュニケーションのどの段階まで達成できたのかということをちゃんと提示できるようにしたいと考えています。

この辺りは、今日の後半の議題にも関わってきますので、後ほど詳しく議論していただきたいと思います。

次に、今年度の業務計画書をご覧ください。資料1-2です。

1、3は省略いたします。変わってはいけない部分ですので、同じことが書いてあります。

今年度の実施内容が、「4. 当該年度における成果の目標及び業務の方法」に書いてあります。

(1) フォーラム(第2期)の準備と施行。平成25年度に実施したフォーラムを改善し、平成26年度上期に複数回のフォーラム(第2期)について準備し、実施する。フォーラム準備段階の研究者会合、及び、フォーラムで話し合われたことを記録し、ホームページで公開する。

(2) フォーラム参加者への継続的意識調査による効果測定。こちらは、原子力学会の特別専門委員会に再委託をして、実施する項目です。各回のフォーラムにおいて、アンケート調査を実施し、参加者の意識変容、態度変容、相互信頼の程度、フォーラムへの評価等を測定し、フォーラムの効果を定量的に明らかにする。昨年度の報告書の3.2で分析されている部分になります。

(3) フォーラムの効果検証とシステム化の検討。全フォーラム終了後、参加者にインタビューを実施し、参加者の意識変容、態度変容、相互信頼の程度、フォーラムへの評価等を定性的に明らかにする。フォーラム記録と併せて分析し、参加者に感じられたフォーラムの効果がいかなるダイナミズムと関係していたかを明らかにする。また、「原子カムラ」の境界を越えられたかどうかという観点およびフォーラムのシステム化の観点から、フォーラムの効果検証を行う。

(4) 研究推進は、全体会合や、学会での発表、シンポジウムなどになります。

ということで、第2期フォーラムを実施して、しっかりと研究の中身を詰めて、フォーラムを整理していこうというのが今年度の実施内容になります。以上ですが、いかがでしょうか？ よろしいでしょうか。

資料1-3は、今年度のメンバー一覧です。

—— 外部評価委員の森田先生ですが、移籍をされて、国立社会保障・人口問題研究所の所長に就任されています。

(木村_浩) そうでした。連絡が来ていたのに、直すのを忘れていました。森田先生は移られたので、改めて、お引き受けいただけるかどうか、これから打診する予定です。

2. フォーラム後インタビューの分析、フォーラムのシステム化について

(木村_浩) では、今日のメインの議題に移りたいと思います。

資料1-4に基づいて、前半を竹中君から、後半はシステム化に向けてということで私のほ

うから、話したいと思います。まずは竹中君からお願いします。

(竹中) 全部終わってから一斉に質問を受けるという形ではなくて、ひとつひとつ区切っていくので、その都度ご指摘いただければと思います。

フォーラム全 5 回が終わった後、インタビューを実施しました。このインタビューを分析した結果、どんなことが分かったのかをまとめています。

まず、どのようなインタビューをしたのかというと、1 番目の項目は、原子力やエネルギー全般について、あなたのお考えをお聞かせください。その上で、1-1 で、フォーラムに参加する前はどのように思っていたか、1-2 で、フォーラムに参加した後はどう思っているのかを聞いています。1-3 で、どこが変わって、その変わったきっかけは何ですかということ聞いています。基本的にこのような形で、フォーラム前、フォーラム後、変わったきっかけを聞いています。1 番は原子力やエネルギー全般について、2 番は原子力ムラについて、3 番は原子力の専門家について、4 番は一般の人々と原子力の関係、5 番はフォーラム全体に関して、印象に残っていること、改善してほしいことを聞いているということになります。

では、それぞれの項目について、首都圏住民参加者、原子力学会員参加者にどのような変化があったのかを見ていきます。

まず、首都圏住民参加者についてまとめています。

4 ページに、原子力・エネルギー全般に関する首都圏住民参加者の態度の変化をまとめています。多くの方は変化がないとおっしゃっています。これは土田先生のアンケート調査の結果と少しずれるのですが、インタビューの中では変化していないと感じているけれども、実はアンケートの中では少し変化がある、というような違いがあるということが分かっています。

フォーラムを 5 回やったけれども、原子力への態度に大きな変化はないというのがこのポイントなのかなと思います。ここについて何かご質問はありますか？

—— 「程度の強い反対」の中の、「マネジメントする力が足りない」というのは、原子力発電所を安全に運転していく力がないという意味ですか？

(竹中) 全体を見渡して、原子力を評価・管理、どうしていくかということを考えられるような人がいない、ということです。専門家といっても、一部分の専門家しかなくて、全体をまとめて見られる、まとめて引っ張っていけるような人がいない、という意味です。

—— 一番下の「いずれはなくなってもよい」「代替エネがない状態で火力に頼るのは未来の負担になる」というのは、どうして「賛成」になるのですか？

(竹中) 部分的には賛成、くらいでしょうか。

—— 全体賛成の方はいらっしゃらなかったということですね。

—— 「いずれはなくなってもよい」という文言は、「賛成」に入るのか、という質問でしたが、この分析では「賛成」に入れた、ということですか？

(竹中) そうです。「部分的な反対」とは明確に分けるべきであるということです。「いずれはなくなってもよい」というのは、「なくなったほうがいい」と言っているわけではない、今は使うべきだということで、「賛成」にまとめていいと思っています。

—— この手のことをやると、「分からない・不明」だった方が、対話をすることで、賛成や反対に色分けされるというのが相場なのだけど、今回は初めから「分からない・不明」とする回答者が0なのですね。

(木村^浩) インタビューだと、分からないけど、分からないなりに意見を持っているのです。アンケートでは「分からない」と書くのだけれども、インタビューで聞くと、やはり何らかのイメージは持っていて、そのイメージを話してくれるので、こんなふうに出てくるということです。

それから、これはフォーラム後に行ったインタビューなので、自分の記憶を書き換えている可能性もあります。そういえば昔からそう思っていた、と書き換えていて、その記憶を話している場合はあります。

(竹中) この質問は賛成、反対で答えられるものなので、あまり考えがまとまっていない方でも、ある程度は答えられるのだと思います。

一方で、「原子カムラ」の場合、「知らなかったです」とはっきり言う人がいました。

—— 「自然エネルギーへの期待が過剰だった」という意見変容があるのですが、どういうことをしたら、こういうことになったのですか？

(竹中) この方は、地熱発電はキャパシティが大きいというか、まだまだいろいろな場所のできるということをごどこかで知って、そう思っていたのですが、フォーラムの中でいろいろ話をする中で、「地熱発電は、いろいろな場所できると言われているけれども、できる場所を実際にマップで見ると、そうでもないのですよ」という話があったと。で、その人が家に帰って、インターネットで環境省などのホームページを見て、そのマップを見ると、ああ、山の中にしかないのかということを知ったという、知識ベースの変容です。

—— 自然エネルギーに関する特殊なプレゼンをしたわけではなくて、そういう何気ない話し合いの中で変容したと？

(竹中) そうです。

—— 私は、「賛成」という表現は強すぎる気がします。せいぜい「部分的賛成」だと思います。

—— 「容認」くらいでしょうか。

—— より確信を深めた、という意見はなかったのですか？

(竹中) この項目ではありませんでした。より確信を深めた、とおっしゃっている場合は、ちゃんと分けて書いています。

では、次に移ります。首都圏住民参加者の原子カムラに関する意見の変化です。フォーラム参加前は、原子カムラを知らないという人がかなり多かったということです。なので、変化は、イメージを持つようになった、原子カムラがあることを知った、というような意見がほとんどだったと思います。ただ、こんな意見もある、こんな意見もあるというような内容のフォーラムだったので、難しくて全然分からなかったです、ということもフォーラムが終わってからも思っていた方が何人か見られました。それが、「原子カムラが何かわからなかった」の3名です。

—— フォーラム前に、「原子カムラのイメージを持っていた」人が3人いたのですよね。その中から、「原子カムラが何かわからなかった」に移った人がいたということですか？

(竹中) そういうことです。

—— 自分なりに何らかのイメージを持っていたのだけれども、話し合いの中でいろいろなことを聞いて、やはり分からなくなった、という感じですか？

(竹中) そうです。私のイメージだけではないのか、ということで、何がなんだか分からなくなった、という方がいました。

—— それが「イメージが不透明」につながるのですか？ 不透明という意味がよく分からなかったのですが。

(竹中) 「イメージが不透明」は、「イメージがつかめなくなった」ということです。

—— ならば、「つかめない」と書いたほうがいいのかもかもしれません。

—— 原子カムラの特徴がいくつか挙げられていますけれども、「マスコミが作った言葉」を除くと、原子カムラでなくても、医者ムラでもマスコミムラでも、いろいろなムラに当てはまるような気がします。

フォーラムに参加された方たちは、特にマスコミが取り上げた定義を強く意識してムラを捉えていたのか、それとも、ムラというのはどこにでもあると考えているような人がこの中にいらしたのか、その辺りに関心があるのですけれども。

(竹中) 首都圏住民参加者をまとめて議論することはできないと思います。皆が皆同じと言うことは、当然ですが、できません。

こうまとめてしまっているから分かりにくいのかもかもしれませんけれども、「マスコミが作った言葉」ということを、この5人全員が言っているわけではありません。

それから、「こういう意見もあるということが分かった」と言っている人たちが、その意見にどのくらい納得しているかまでは測れていません。

—— 原子カムラのことを知らない人が7人いた。その人たちのうちの5人は、原子カムラの特徴やイメージを持つようになったと。2人は変わらなかった。

一方で、「原子カムラのイメージを持っていた」3人のうち、変わらなかった人は2人で、むしろ分からなくなった人が1人いたと。

ということは、トータルで見たら、10人のうちの7人が、原子カムラのイメージが強くなったということですよ。

(竹中) そうです。

—— 原子カムラを知らなかった人たちがフォーラム後に持つようになったイメージと、原子カムラのイメージを持っていた人たちが最初から持っていたイメージは、同じものですか？ 同じようなことを文言を変えて書いているだけなのか、まったく内容が違うのか。そこまでの分析は難しいでしょうか。

(竹中) ここはあまり本題ではないということで、それほど詳しく聞いていない、という事情もあります。「原子カムラについてどう思いますか」という聞き方で、「あなたにとって、原子カムラとは何ですか」というような、定義してもらおうような聞き方をしていない

いので。ですから、印象に残っている言葉だけが出てきているのだと思います。「他にもいろいろな言葉が出てきましたけれども、この中であなたが納得しているものはどれですか」というような聞き方はしていないので、その人にとってのイメージが明確に出てきているわけではないのです。

ですから、「イメージを持つようになった」という程度のまとめ方で、1人1人のイメージで分ければもっと分けられるかもしれないし、実は同じなのかもしれないですけども、そこまでは分析できていないというのが現状です。

—— 「ムラ」というとネガティブなニュアンスが含まれるのですよね。だけど、それとは別に、原子力ムラを構成している原子力に携わる専門家たちのイメージがはっきりした、という意味も含まれているかもしれません。だとすれば、イメージが明確になったというのは、別にネガティブなイメージではなくて、ムラの構成員はこういう人たちなのね、という程度のこともかもしれない。

(竹中) それについては、この後、原子力専門家についても聞いていて、ムラについて言っているのか、原子力専門家について言っているのか、区別して分析しています。

—— 分かりました。

(木村^浩) おそらく、右下の四角にある「組織の上部の人たちという印象が強まった」というのは、まさに、全体がそうではなくて、ある特殊な人たちの集まりがどうもありそうだったと思った、ということだと思います。「マスコミが作った言葉」というのも、レッテル貼りがあるのだと思った、ということですから、必ずしも、原子力ムラについて、悪いイメージを持つようになった、ということではありません。

—— そうですね。いいところも悪いところも含めて、淡々と言っているのだと思います。

(木村^浩) あと、どうしてこのイメージを持つようになったのか、そのきっかけを調べておくと、「フォーラム前からイメージを持っていた人たち」からそれが伝播したのか、そうではないのかが分かるかもしれません。

第1期では、第1回終了後のアンケートで「原子力ムラのことを結局よく分かりませんでした」という意見がかなり多かったので、第2回の冒頭に、竹中君が、原子力ムラという言葉が新聞の中でどう扱われているのかをプレゼンしているのです。だから、それに引きずられている可能性もある。

変化のきっかけを明確にしないと、その辺は答えにくいのかなと思っています。まあ、あまり本題でないないので、スルーしているところではあるのですけれども、

—— 最初の 3 名の方の持っていたイメージと、あとから持たれたイメージが同じか違うかは、個人的には興味があります。

(木村^浩) 本当にコミュニケーションの中でそのイメージが伝播したのかどうかというのは、分析が難しいですね。いろいろな条件があるので。

(竹中) 変化のきっかけも当然インタビューで聞いているのですけれども、なにせ第 1 回、第 2 回辺りのことなので、記憶が曖昧なのか、「全体を通して」という答えが多かったのも事実です。

では、次のページに移ります。首都圏住民参加者の、原子力の専門家に対する意識・態度の変化についてです。

左上の四角に n が入っていないのですけれども、ここは n=7 です。この 7 人は、「専門家というのは皆こんな人だ」というような一様なイメージを持っていました。その一様なイメージはどういうものかということ、東電の人や、テレビに出てくる人たちみたいな人が専門家だ、というような意見が多い。その印象は、難しいことを言う、市民を見下す、話がかみ合わない、本音を話さない、市民のほうを見ていない、市民の考えを分かっていない。性質としては、無責任、信念がない、閉鎖的である、情報隠ぺいをしている、暗い、気難しい。一番下は悪いイメージではないのですけれども、誇りをしっかり持っていて、専門的なことをしっかり知っている人ではないか。こういった一様なイメージを持っている、ということなのです。

それがフォーラム後どうなったかということ、一様だったイメージが、いろいろな専門家がいるということに気づいたということです。いろいろな原子力への携わり方があるということに気づいた。話はできるし、意見を聞こうとしてくれる。分かり合える部分もあれば、考え方や認識にギャップを感じる部分もある。専門家にもいろいろな人がいて、自分のイメージと異なる人もいる。実は不安や葛藤を抱えている。普通の人、つまり、人間らしいところがある、という意見が聞かれました。

その下にまとめてある変化なしの 2 人は、原子力の専門家について、イメージを持っていて、それが変化しなかったというものです。

一番下は、他の人とは逆方向の動きをしているので、特殊なので分けています。フォーラム前は信頼できるという意見だったのが、フォーラム後は信頼が少し落ちたという変化が見られます。

次のページに、どういうきっかけで変わったかということが書いてあります。これを簡潔にまとめたのが、23 ページの図 3-39 です。

「思い込み・勘違い」という状態から始まって、「いろいろな形で携わっている」ということに、フォーラムの早い段階で気づいています。自己紹介を聞いたり、少し話してみる

と、相手の仕事のことが分かって、そういうことに気づくと。

さらに対話を行っていくと、意外と「普通に会話ができる」のではないかと気づく。

さらに、その人の意見や立場、人となりを知って、「専門家にもいろいろな考えがあるんだ、専門家も1人の人間なんだ」ということに気づいていったということです。フォーラムの中だけではなくて、フォーラム後の歓談や、第1回の後の懇親会の中での会話も重要だったようです。

そして、最終的には、分かり合える、理解できる部分もあるけれども、専門家と市民でギャップがある部分もある、ということに気づく。

このような段階的な変化が見られるのではないかと、ということをもとめています。変容のきっかけは図の右に小さくまとめていますが、7ページにはいくつか具体的な例を挙げています。

ここまでで質問やコメントをいただければと思います。

—— 7ページに、「専門家の中にも原子力に関して否定的な発言をする人がいた」とか、「専門家は原子力を進めるべきだと言うに違いないと思っていたけれども、実際はそうではなかったので驚いた」という記述があります。こういった発言によって、おそらく、信頼性が増したと思うのです。この辺りは、社会心理学者のジャニス、ホブランドなどが予測している結果とぴったり一致しているので、腑に落ちる話ですね。要するに、自分にとって都合が悪い話を積極的に言っている人たちの言説は信用できる。

—— n=7の四角は、この7人の人たちが言ったことをまとめたものだと思うのですが、それ以外の3人は、特に一番下の人は、これしか言わなかったということですか？

(竹中) そうです。あまりコメントがなかったので、どうまとめるかが非常に難しかったのですが、一番下の人は、専門家のことは信頼しているというほぼ一言のみでした。

—— その信頼がフォーラム後に落ちたのはなぜですか？

(竹中) サラリーマン的な発言をされたことが非常に大きかったようです。

—— どういう発言ですか？

—— つまり、「いわゆる専門家像」を期待していたけれども、「普通の人だった」ということを、ネガティブな意味で捉えたということですか？

(竹中) その人の専門家像の中には、責任感を持って話す、というものがあつたのですけれども、他人事のように、「こういうところに悪いところがあるんですね」という答え方をしたときに、ああ、専門家ってそういう感じなんだ、ということで少し信頼が落ちたと。

—— そうすると、図 3-39 で言っているのは、 $n=7$ の集団の変容なのですか？

(竹中) そういうことです。

付け加えると、図 3-39 の一番下、お互いを理解して、違うところがあることも分かるけれども、それでいいと思っている、というところまで到達すると、フォーラムのひとつの目的である「尊重する」が達成されたと考えられます。 $n=7$ の人は、ここまで到達していると考えられるということです。

—— 「(イ) 原子カムラ」の「原子カムラを知らない」の 7 人と、「(ウ) 原子力の専門家」の「一様なイメージを持っている」の 7 人は、何か関係あるのですか？

(竹中) (イ) と (ウ) はあまり相関がありません。(イ) の 7 人と (ウ) の 7 人は、同じではありません。

—— 人数が同じだけで、違う人なのですね？

(竹中) はい。まあ、でも違うのは 1 人だけですけれども。まあ、でも、(10 人なのだから) それくらいになるとは思いますが。

—— では、質問をし直すと、「原子カムラを知らなかった」の 7 人の方が、「(ウ) 原子力の専門家」においては、どこに何人、どこに何人というのは、すぐにお分かりになりますか？ というのは、「原子カムラのイメージを持っていた」3 人は、「(ウ) 原子力の専門家」における下の 3 人なのかなという気がして、そうすると、相関があるような気がするのです。

(竹中) 「原子カムラを知らなかった」の 7 人のうちの 1 人が、「(ウ) 原子力の専門家」の一番下の人です。

—— では、「原子カムラを知らなかった」7 人のうちの 6 人は、「一様なイメージを持っていた」人ということですか？

(竹中) はい。

—— 関係があるということですね。

(竹中) 10人のうちの7人でそう言っているのかどうか。

—— ええ、その人数で相関分析やクロス集計をしてもまったく意味はないけれども。

(木村_浩) 今回のインタビューは、フォーラムの中でコミュニケーションが成立しているかどうかの分析がメインなので、実は(ア)、(イ)の部分は、どこがどのように関係しているかほとんど分析していないというのが実情なので、記憶が曖昧なところを突っ込んでも意味がないと思います。

—— 分かりました。分かったら教えてください。

(木村_浩) それから、誤解されると何なので言っておくと、(ウ)のn=7の人は、「専門家を一様なものとして扱っている」という部分が共通しているのもあって、「一様なイメージ」の中身は7人が必ずしも同じではありません。「一様なイメージ」の中身は、7人それぞれにいろいろなバリエーションがあります。

さらに言うと、なぜここでこの7人をくくったかという、ある種のステレオタイプの考え方で、専門家集団を一様な集団として見ていた方が、そうではなかった、いろいろな人たちが集まっている、というふうにイメージを変容したということが、コミュニケーション上大切だという判断で、こういう図になっています。

—— では、たくさん箇条書きになっているところは、全員がこれに当てはまっているわけではなくて、このうちのどれかに当てはまっているということですね？

(木村_浩) そういうことです。でも、全体としては、「一様なもの」から「多様なもの」という変化が見られたと。そこが7人に共通しているということです。

—— この項目立ては木村先生たちがやって、この項目に当てはまった人をこのように分類したということですね？

(竹中) そういうことです。一様、かつ、ネガティブなイメージを持っている人を集めたということです。

—— 図 3-39 の、「部分的には分かり合える、理解できる」「部分的にはギャップがある」というのは、それぞれ何人ずつなのですか？

(竹中) これは分かれているというより、両方同時に気づくということです。

—— 1人の人が、分かり合えるところもあるけど、ギャップもありましたと言ったということですか？

(竹中) そういうことです。

(木村_浩) 図が矢印 2 本出ているから紛らわしいのだと思います。併記にしたほうがいいですね。

(竹中) 9 ページに、「部分的には分かり合える」や「ギャップがある」の具体的な特徴が挙げられています。先ほどと同じように、7人全員がここに挙げているもの全てに当てはまるというわけではなくて、個別の意見を箇条書きにして出しているということなので、全員がこのように思ったわけではない、という点は注意して見ていただければと思います。

(木村_浩) 時間もないので、次に行きましょう。

—— すみません、失礼しなければいけないので、一点だけ。

9 ページの「部分的に分かり合える」という部分に書かれている内容は、ほぼ全て、専門家に自分たち（市民）と同じ部分があるから理解できる、というものですよね。

「ギャップがある」という部分の内容で、例えば、下から 2 番目に「定義づけにこだわる」というものがありますけれども、逆に、「専門家はこういう理由で定義づけにこだわるのか」というような、専門家が元々持っている特徴を理解した、という発言はほとんどありません。

「理解できる」理由は、ほぼ全て、専門家も我々（市民）と近いところがある、というものになっている。第一段階としては、それは重要かもしれない。ただ、この話をずっと続けていってしまうと、「一般の人に理解してもらえる専門家というのは、何かしら一般の人たちに近い専門家だ」という話になってしまう。専門家が一般人の考え方を理解することは重要けれども、市民の考え方を自分たちも持っているのですということをもって理解してもらった、というだけにしておくのはどうなのかなと思いました。以上です。すみません、失礼いたします。

(木村_浩) そういう違いを許容していくというステップを「コミュニケーションのステッ

プ」の中で入れていて、その達成度も一応分析しようと努力はしています。どうもありがとうございました。

では続きをお願いします。

(竹中) 次は、首都圏住民参加者が一般的な市民に対してどういう意見を思っていて、フォーラム後どう変わったのかというところです。

大きく分けると、市民は皆原子力に反対していると思っていた人と、市民は皆原子力に無関心だと思っていた人の 2 つに分かれると思います。どちらの方も、ほとんどは変化がありません。

これについては、普段からもっとたくさんの市民と接しているわけで、フォーラム参加者の 10 名（自分を除くと 9 名）の首都圏住民を見て、自分のイメージと違う人はいたけれども、では市民一般に対するイメージが変わるかという、そうではないという人がほとんどであったということです。

—— 「原子力について話しづらい」の中の、「うかつには話せない」というのは、例えば、自分は原子力が必要ではないかと思っているけれども、今そういうことを言うと、皆に何を言っているんだと言われてしまうで話せない、というようなニュアンスですか？

(竹中) この人は、原子力反対の意見を持っています。ただ、反対という意見を言う上で、反対の理由もあれば、メリットもある。そういう議論をしたいと思ったときに、メリットをひとつでも挙げると、そういう目で見られてしまう、という意味です。

—— ああ、お前は推進派なのではないか、と思われてしまうということですね。

(竹中) そういうことです。ちょっとでも認めるような発言はできないと。

—— その議論の相手というのは、フォーラムの中の市民ですか？ あるいはご近所の方ですか？

(竹中) ご近所の方ということです。

では、次に移ります。自分自身がどう変わったかということについて整理したものです。まず一番上が、考え方に変化はないという人です。

その下に 4 つの意見が並んでいます。1 つ目は、勉強する機会になった、自分がどういう意見を持っているのかを確認したというような、自分が成長したという意見です。2 つ目は、専門家と人としてコミュニケーションがとれたという意見です。3 つ目は、専門家の考え方を理解できた、あるいは、考え方を理解する方法を学んだ、という意見です。4 つ目は、原

子力に積極的に関わっていかなければならないという意見です。どこに何人が属するのかわ、右に示しています。

—— $n=1$ が1つだけにかかっているものと、2つにかかっているものがありますけれども、どういう意味ですか？

(竹中) 「専門家と人としてコミュニケーションがとれた」だけをおっしゃった方が1人いて、それとは別に、「専門家と人としてコミュニケーションがとれた」「専門家の考え方を理解できた、考え方を理解する方法を学んだ」の両方をおっしゃった方が1人いる、という意味です。つまり、3と2と1と1と3を全部足して10人になると。

書き方が分かりにくかったですね。

—— では、一番左に書いてある $n=3$ は、この4つの意見を全部言っているということですか？

(竹中) はい。4つ全てを言っている人が3人いたということです。

この4つのブロックの中の、特に下の2つは、市民から専門家に近づくという動きであるということで、「専門家の考え方を理解する方法を学んだ」の具体例を、次のページの表にまとめています。

(木村_浩) ここで言う「理解する」というのは、どういう意味ですか？ この後で「許容する」という話が出てくるけれども、それとはまた別のレベル？

(竹中) いや、ここは「許容する」というレベルの話ですね。

そういう意味では、先ほどの「こういうところにギャップがある、こういうところを直してください」という話は、ここの「考え方を理解できた」には入れていないと思います。「考え方を理解できた」というのは、「違っていてもいいと思える」というところまでを含めています。

—— 「ギャップがある」という人は、理解している場合も、理解できていない場合もあるということですか？

(竹中) そうということです。

(木村_浩) ギャップを認識して、理解できないというのは、どういう状態ですか？

(竹中) ギャップがあって、そのギャップはあちら(専門家)が縮めるべきだ、というのは、ここには入れていないと思います。

(木村_浩) 「縮めるべきだ」は行動のレベルでしょう。

(竹中) そうですね。「理解できない」という言葉はまずい気がしますね。
いや、入れているのかな、ごめんなさい、少し確認します。

(木村_浩) この「理解する」というのは、「許容」なのですか? 「認識」なのですか?

—— 先ほどの23ページの図3-39は、「部分的には分かり合える、理解できる」と「部分的にはギャップがある」は同時だと言ったから、部分的には分かり合えるけれども、部分的にはギャップがある、ということ「理解した」ということですか?

(竹中) すみません、ここは「許容」の概念は入っていないと考えてください。ギャップがある、あるいは、部分的には同じ部分があるということに気づいた、ということ「理解した」と書いていると思ってください。

—— 先ほど鋭いご指摘がありましたが、「専門家も市民も考え方は何もかも同じなのね」となったら、専門家の存在意義はなくなってしまいます。やはり、「専門家は、一般市民にはない高度な専門性を持っている、ということに気づいた」という話がないと、専門家としてはさびしいでしょう。だから、そこにギャップを感じても不思議ではないと思います。

専門家と言っても、普通の市民と共通項もたくさんあって、そこで理解しあえるという話と。専門家には、市民には一言二言では分からない、専門性の高いところもあって、そこにはやはりギャップがあって、短時間の話ではなかなかそのギャップは埋まらなかったという話と。その2つを同じ人が思っているというのは、普通のことだと思うのです。

—— その話は、まさに12ページの表に書いてあります。

(木村_浩) 表3-47のタイトルが分かりにくいですね。これは、「ギャップを縮めようとする方法として、首都圏住民参加者が挙げていること」でしょう。「理解する方法」と書くと、よく分からなくなるから。首都圏住民参加者がそういうギャップを受け入れるなり、縮めようとして努力をしていたのは事実なわけだから、むしろそういうふうにしたほうがいいのではないのでしょうか。

(竹中) 分かりました。今の議論を受けて、整理し直したいと思います。私が勝手な先

入観で、ギャップの部分しか挙げていないような人は「理解できた」に入れていなかったりしているのですよ。

(木村_浩) 「理解」という言葉は軽々しく使わないほうがいいです。

—— 「理解」には「同意」という概念が入ってしまうので。

(木村_浩) 「許容」なのか、「認識」なのかで話が変わってしまいますから。「理解」というのは、「同意」が入るのですね。

(竹中) 整理して図を作り直そうと思います。

—— 図 3-39 の「ギャップがある」という言葉は、分かり合えないという意味なのですか？「専門家も 1 人の人間なんだ」、そして、「部分的には分かり合える」。これに対立したものとして、「ギャップ」という言葉が使われているのですか？

—— 単に「差がある」ということではないのですか？

(竹中) 差があって、さらにその差をあまり相手が認識していないときに「ギャップ」という言葉が使われている、というのが基本的だったと思います。あとで確認しますけれども。

(木村_浩) これは「認識」の議論なので、本来は、「差がある」ものを「差がある」と「認識」している、というだけの話でしょう。本来、それが書かれていないとおかしい。

その次に、その差を、「やはり受け入れられません」とするのか、それとも、受け入れようと努力をし、どういう行動を起こしているのか。そうやって順番を分解しないと分からないかもしれないですね。その辺がうまく分析できていないかもしれない。

—— 差がある、差がない、許容できる、許容できない、というマトリックスになるのかな。

(木村_浩) おそらくそうなるはずですよ。まあ、差がないところは許容できるので。

—— そうですね。他がどうなるかですね。

(木村_浩) はい。おそらく人によってレベルも違ってくるし、コミュニケーションすると

きにどのように変わっていったか、というのもあるでしょう。

—— 「ギャップ」という言葉は否定的に使われることが多いですね。「差がある」という言葉のほうがいいのではないのでしょうか。

—— 「差がある」というと、どちらかがよくて、どちらかが悪い、というようなニュアンスがあるから、「違いがある」くらいがいいと思います。

—— 欧米では差があるほうをよしとするという受け止め方があるのです。一方、「ギャップ」というのは、どう努力してもなかなか接近しづらいというような意味があります。

ここでおっしゃっているのは、接近しづらいというレベルだとはとても思えないのですけど。つまり、「差がある」くらいだと思います。

(木村_浩) 時間も押していますから、先を急ぎましょう。

(竹中) では、13 ページです。ここからは原子力学会員参加者の分析結果です。

まず、原子力・エネルギー全般に対する考えですが、原子力学会員参加者が原子力に対する態度を変えたということは基本的にはありません。

—— やはり信念があるのですね。

—— それでも首都圏住民参加者の方は、ネガティブなことを言った、という印象を持っているということですね。

(木村_浩) 9 人全員が「原子力は必要である」とおっしゃっていますが、ただ、その中に「意見が分かれる点」がさらにくくってありますね。「20 年後、30 年後にはなくなっているかもしれない」というところは意見が分かれていて、最初からそう思っていた学会員参加者は、フォーラム後も変わらずそう思っていたと。おそらく、首都圏住民参加者の方が聞いた「ネガティブな発言」は、この部分だと思います。ということでいいですか？

(竹中) うーん、検証できるかどうか…。

(木村_浩) 誰が言っているのかが分かれば、どの人がどんな発言をしたか見えるのではないですか。

「原子力なんてなくなればいい」という発言は、記録の中にはなかったはずですが。ただ、首都圏参加者は、自分が思っていたよりも否定的な言葉を言ったなと思っている。で

も、学会員参加者は、原子力を否定しているわけではない。そういうある種のスコミュニケーションが、ある種の変容を促している可能性もある。

(竹中) そういう検証をしようとしたときに、単に「専門家がネガティブなことを言った」だけだと、どの発言か分からなくないですか？

(木村^浩) 記録の中から、こういう事例があった、というものをいくつかピックアップすればいいと思います。

(竹中) はい。では、次に、原子力学会員参加者の原子力ムラに対する考えの変化です。原子力学会員参加者は、ほとんどの人が何らかのイメージを持っていました。聞いたことがなかった、漠然としたイメージしかなかった、という方が 2 人いらっしゃいます。フォーラム前のポイントは、ムラと呼ばれていることは知っているけれども、ムラが別に悪いものだと思っていなかった、という人が多かったという点です。

ほとんどの人は、原子力ムラのイメージは変化していないと答えています。その上でポイントになるのは、自分のイメージには変化はないけれども、どう思われているのかを知った、あるいは、ムラというものがあるということを再認識した、という意見が見られた点です。

ここもあまり本質的なところではないと思いますが、何かありますか？

では、次に進みます。原子力学会員参加者が一般市民に対してどういう意識を持っていたか、フォーラム後にどう変化したかというところです。まず、フォーラム前の考えですが、左上は、「一様な市民のイメージ」を持っていたという意見で、5 人が当てはまります。その下が、市民は無関心層と反対層を合わせたものだ、という意見です。一番下は、無関心層と反対層に加えて、声は発さず今のままでよいと思っている人がいる、という意見です。

フォーラム後にどのように変化したかという点、矢印がたくさんあって分かりにくくなっていますけれども、一番多いのは右下に向かう変化で、多様な市民がいるけれども、その中で共通している特徴がある、という意見です。ポイントは、いろいろな市民がいると言いながらも、市民の特徴をまとめたがるという点です。「皆こんな感じでした」というようなコメントが非常に多く聞かれました。その四角の中に、さらに小さい四角で、 $n=1$ で書いてありますけれども、「同じ価値観の部分もある」というコメントを残した専門家は非常に少なかったです。首都圏住民参加者は、同じ価値観の部分もあるが、ギャップもあると言っている、という話をしたのですけれども、学会員の場合、両方とも感じたとしっかり話しているのは 1 人だけでした。

一方で、考えが変化しない人も多く、フォーラム参加者は意識の高い人だから、普通の市民とは違うという形で、自分の市民像の例外的な存在としてフォーラム参加者を扱って、

自分の市民像は変化させないというのが、右上の変化なしの2人です。

その他に、分析が難しいのですが、自分のイメージを補強するための特徴だけを取ってきて、あるいは、取るために自分にバイアスをかけて、証拠を深めて、自分のイメージを強めるというような変化のパターンが見られました。実際には市民皆がそうではないのに、「皆こういうふうに言っていたので、私の考えは正しかったです」というような意見を言っている学会員もいらっしゃったということです。

学会員に関しても、23 ページの図 3-40 に意見変容のプロセスをまとめています。今言ったように、「フォーラム参加者は意識の高い人である」と分けてしまう人や、市民を共通のものとしてまとめたがるのが、学会員に見られる特徴です。下から2つ目の四角、「向き合えば理解してくれる人もいるし、そうでない人もいる」というところで、学会員参加者の意識の中には、「理解してもらおう」という市民への向き合い方が前提に入っている、という点もポイントです。

16 ページの表 3-48 に、原子力学会員参加者が挙げている、「いろいろな市民がいる」と言ったときの「いろいろな」はどのような意味を持っているのか、をまとめています。読んでいただければ分かると思いますが、「多様な市民がいる」というところで挙げられている特徴は、ほぼ全て、「理解してくれる」「考え方を変える」「話を聞いてくれる」というような、専門家側が説明して理解してもらおうということを前提に見たときに、いろいろな市民がいる、という意味での「いろいろな市民」がほとんどです。今回のフォーラム参加者はそういう目で市民を見ているということが言えるのではないかと思います。

—— 先ほど、こういうところに集まる市民の方は特殊だというような話がありましたが、こういうところに集まる専門家のほうがもっと特殊かもしれないですね。フォーラムに集まった専門家はどのようなのでしょうか？

(竹中) 個人的には、特殊だと思っています。

ただ、首都圏住民参加者は、フォーラムに来ている原子力学会員が特殊だと思っているかということ、そうではありません。

(木村_浩) 世論調査の結果から大きく外れているかどうかという意味で言えば、特殊ではありません。ただ、コミュニケーションに関する意識が高い可能性はあります。

—— 図 3-35 を見ると、特殊なのかなという感じもしますよね。市民は無関心と反対、という固定観念を持っている方がいらっしゃるのです。

(木村_浩) でも、それは普通だと思いますよ。この分布は特殊ではありません。

—— 図 3-40 で、「部分的には分かり合える、同じ価値観」が点線になっているのですが、どういう意味ですか？

(竹中) 15 ページの図 3-35 に、「多様な市民がいる、その中で共通する特徴がある (n=6)」のさらに下に、「そして、同じ価値観の部分もある (n=1)」と書いてありますけれども、つまり、同じ価値観の部分もあるというコメントを残している学会員参加者は非常に少ないということ、点線で表しています。

—— そうしたら、図 3-40 は、「部分的にはギャップがある」と書いてありますけれども、「ほとんどギャップだらけ」のほうが正しいのではないですか？

—— 見ているものが違うのではないのでしょうか。首都圏住民参加者は、「何が同じなのだろうか」と見えていて、学会員参加者は、「何が違うのだろうか」と見ているような感じがするのですけれども。

(竹中) 何が違うのだろうと見ている、というよりは、「市民とは違って当然だよ」という前提から入っているように思います。

—— 「そして、同じ価値観の部分もある」と発言したのは 1 人しかいなかったということだから、残りの 8 人はそれを発言しなかったということですよ。そもそもそれは当たり前だと思って発言しなかったのか、否定しているから発言しなかったのか、区別はつかないですよ。

(竹中) そこは区別がつかないですね。

(木村_浩) 他の部分でもそういう話はたくさんあります。第 1 期は、モデルもなくインタビューをして、探索的にモデルを作っていました。第 2 期は、検証フェーズに入るの、インタビューも、そういったことが検証できるようにちゃんと組み立てるつもりです。曖昧さが残ったところをちゃんと整理するような手法の開発が必須だと思っています。

—— 言わなかったからといって、そういう考えを持っていないと決めつけるのは、確かに危険ですね。

(木村_浩) ただ、「同じ価値観もありましたよね？」と聞いてしまうと、「それはあるでしょうね」と皆が言う可能性がある。その人の中でどちらに重きがあるのかということ、をちゃんと分かるように聞かないと、難しいです。

—— 聞き方は難しいですね。誘導尋問になってしまうおそれがあるということですね。

(木村^浩) ただ、絶対にそういう突っ込みは来るはずなので。そういうところがあるから、これはまだ論文レベルとは言えないのです。報告ペーパーとしてはいいと思うのですけれども。

—— 3年計画の2年目の報告書ですから、3年目がしっかりできれば問題ないのではないのでしょうか。

(竹中) では、次に行きます。原子力学会員参加者の一般的な原子力専門家に対する意見です。基本的には、フォーラム前後で変化していません。

ただ、フォーラムに参加した学会員の中で、少し引いた目で原子力を見ている人と、そうでない人がいて、お互いに思うところがあったようだ、という点を少し書いています。

(木村^浩) 原子力学会員参加者は、自分以外の原子力専門家のサンプルが8人いて、その中に引いている人がかなりいると認識しながらも、専門家集団の中にそういう人たちがそれなりの割合でいるのではないかと、とは思わないのでしょうか？

目の前にいる人たちに対しては、具体的な意見が出ているわけでしょう。それを全て一般化してしまうのはおかしい話ではあるのだけど、少しは専門家一般に対する考えが変わってもよさそうなものだと思うけど。

(竹中) そうですね。そこに関しては、もしかしたら、フォーラムが特殊な場だと思われる、というのはあるかもしれません。フォーラムに来ている人は、専門家も特殊だし、一般の人たちも特殊だ、という考えがどこか頭の中にあるから、そこで何かが起こっても、それを一般的な世界には持って帰らない。

—— 原子力学会員参加者は、この9人だけではなくて、その10倍、100倍の専門家に対する評価をすでに持っているから、自分以外の8人の言動を見ても、その専門家像は崩れない、という意味ですね？

(竹中) それは強いと思いますけれども。

—— フォーラムに参加した専門家に対する考え方はどうか、と聞いたら別だったかもしれないけれども。

(竹中) そうですね。

(木村_浩) でも、そういう意味では、首都圏住民参加者のほうも、市民全般に対して大きく考えが変化した人はいないのでですね。

(竹中) そうです。やはりフォーラムに参加した方より、自分が知っている範囲の人のほうが多いから、その中に少し別の例が加わっても、市民一般に対する考えは変化しないと。

(木村_浩) 首都圏住民参加者のほうは、他の首都圏住民参加者に対する意見は特になかったのですか？

(竹中) 強いて言えば、1名だけ挙げていた方がいました。原子力学会員は、「専門家としてこうあるべきだ」という像が皆ある程度あって、それに当てはまらない人に対しては、「理想の専門家像にならないといけないでしょう」とお互いがお互いに思っている。それに対して、首都圏住民参加者は、理想の市民像をしっかりと持っているわけではないので、そこに近づきなさいという意見を持つことはあまりない、という差があると思います。

では、次に移ります。原子力学会員参加者が自分自身の態度をどう変化させたかということをもとめています。左側に、フォーラム参加前のフォーラムに参加する動機を書いています。ポジティブに「市民の考えを知りたい」と思っていた人が参加しているということです。あとは「自分の考えをまとめたい」という人も数名いらっしゃいました。

学会員全員が口をそろえて言うのは、「市民の意見を知れてよかった」ということです。

フォーラム前後の変化については、まず、変化がなかったという人が3名いらっしゃいます。

変化のパターンは、大きく分けて3つです。1つ目は、専門家として説明する努力をしないといけない、あるいは、説明する機会に参加していかなければならない、市民の意見を聞かなければいけない、という意見です。フォーラムに参加して新たにそう思った方もいれば、そういう意識を強めたという方もいると思います。2つ目は、自分自身が成長したという意見。コミュニケーション・マニュアルなどが非常に役に立った、などの意見が聞かれます。3つ目は、さらにそこから自分の仕事のなところまで持ち帰って、市民にとって安全が大事なので、それに対して自分としてもできることをやるべきだ、というような意見です。先ほどと同じように、右側に、どこに何人が属しているかを示しています。

21 ページは、それほど重要ではないのですけれども、原子力学会員参加者でも全ての項目で変化がないと答えている方がいて、そういう人たちはフォーラムの目的にあまり納得していない、あるいは、理解していないのだと思います。

ここまでの分析を踏まえながら、仮説を立てています。コミュニケーションが取れるようになるまでのプロセスは、5つに分けられるのではないかと、という仮説です。

5つのプロセスは、大きく2つに分けられます。まず、「Ⅰ 判断や価値観（状態）に関する認識」です。1つ目のプロセスは、お互いが異なることを認識すること。2つ目は、共通点があることを認識すること。3つ目は、異なることもあるけれども、違っていてもいいと思えること。この3つを合わせると、お互いを「尊重する」ことができると考えています。ここまでの、フォーラムの目的であると言えます。

次に、「Ⅱ 態度（行動）に関する認識」があります。コミュニケーションが取れるようになるまでには、さらにここから2つステップが必要ではないかと。4つ目は、相手が変わろうとしていることを認識すること。5つ目は、自分が変わろうとすること。今回、対話とコミュニケーションという言葉をしっかり分けているのですけれども、相手も変わろうと思っているし、自分も変わろうと思っている状況で情報伝達がなされないと、それは単なる対話であって、コミュニケーションではない。コミュニケーションが取れるまでということで、こういう5つのステップがあるのではないかと考えています。

このステップに当てはめながら、お互いの変化を見ているのですけれども、第1期フォーラムの特徴的な変化を25ページの図3-41にまとめています。

先ほどから言ってきたように、首都圏住民参加者の中で専門家に近づこうとする態度を持っている人は、実はフォーラム参加前からそういうふうに使っていた。そういう人たちが、知りたいこと、興味のあることを学会員参加者に尋ねる。これに対して、学会員参加者は説明するわけですけれども、そうすると、首都圏住民参加者のほうは、もっと知ろう、もっと専門家のほうに近づこうと考える。このようなことが、第1期フォーラムの中で見られました。

一方で、原子力学会員参加者は、市民に対して説明すると、理解してくれる。さらに言うと、もっともっと（専門家のほうに）近づこうとしてくれている、という態度に気づく。その結果、原子力学会員参加者は、自分が市民に近づこうと考えるというより、市民に専門家に近づいてもらおうと考える。だから、もっと分かりやすく説明しようというような変化が見られた、とまとめています。

最後に、首都圏住民参加者、原子力学会員参加者が、先ほどのコミュニケーションの5つのステップをどこまで達成できたのかを見ています。

首都圏住民参加者の達成度は、大きく3パターンに分かれています。1つ目は、何も変化しなかったというパターン。2つ目は、違うところもあるし、同じところもある。違っていてもいいと思えるという段階まで、すなわち、「尊重する」ことができたというパターン。3つ目は、専門家に近づこうと思えるという段階まで到達したパターンです。ただ、3つ目のパターンの首都圏住民の方々が、専門家が近づこうとしていることを感じているか（ステップ4が達成できているか）というと、インタビューの中でそういった発言は出てきま

せんでした。

原子力学会員参加者の到達度も、大きく 3 パターンに分かれています。まず、首都圏住民の方と同じように、「尊重」まで達せず、ほとんど変化していない方がいらっしゃいました。次に、「尊重」まで行ったと思えるような方もいらっしゃるのですが、その中のほとんどは、ステップ 2（お互いの共通点を認識する）についての言及がありませんでした。ですから、ステップ 3（異なる事の許容）は確認できるのですが、ステップ 2 が達成されているかどうか分からない、というパターンです。3 番目は、お互いの共通点の存在を認識した上で、市民が歩み寄ろうとしてくれていることを感じている、というパターンです。ただし、自分が歩み寄ろうというところまでは到達していません。

最後が駆け足になりましたが、以上で説明を終わります。

—— 学会員は、自分は変わろうとしていなくて、相手が変わることを待っているという姿勢が強いということですね？

（竹中） そうです。相手が変わろうとするのをサポートすることが自分たちの仕事だと思っているということです。

—— 自分は変わらないと。

（竹中） はい。サポートしよう、というふうに変わってはいるのですけれども。

—— こういうときは、必ずしも変化しなくてもよくて、変化をする可能性がまったくないという考え方が変わればいいのですよ。禅問答っぽいですけれども。

（竹中） なるほど、いや、分かります。

自分が変わろうとする気持ちがあるということは、コミュニケーションの結果、変わらなくても構わなくて、変わるかもしれないなと思いながらコミュニケーションをすることが重要だと思っています。そういう意味ではここの分析は非常に難しいと思います。

—— 北村先生の主張では、ステップ 4 と 5 が入れ替わっています。自分が変わろうとする気持ちが先。その後で、相手が変わるかどうかがというのがあるかもしれない。

（竹中） 北村先生の話も見たいと思いますけれども、ステップ 4、5 は、どちらが先というよりは、一緒にいいのかなと思っています。

—— 一緒にいいと思います。「共に変わろうとする気持ち」と言ってもいいかもしれませ

ん。

—— 19 ページの図を見ると、市民に説明する努力をしなければいけない、市民と話す機会に参加していかなければいけないという重要な意見を、5 人の人が共有している。ということは、割とこの 9 人は好成績ではないですか。非常に大事なことに気づいてくれた。まあ、元々そういう意識があるからこそ参加したのだろうけれども。

(竹中) そうですね。ただ、ここが重要なのは分かるのですが、「市民の考え方をもっと取り入れたほうがいい」という意見が出てきたりするとうれしかったな、という気持ちも少しあります。

—— 図 3-37 の「自身の態度に変化なし」というのは、ご自身が変化なしとおっしゃったのですか？ それとも、竹中さんがインタビューをして、変化がなかったと判断したのですか？

(竹中) ご本人がそう言っています。この 3 名の方は、どの項目についても、何も変化はありませんと答えています。

(木村_浩) 26 ページの図 3-42 の、原子力学会員の一番左側の矢印は、その 3 人ということですか？

(竹中) そういうことです。

(木村_浩) この 3 人は、前にフォーラム研究会でも議論になりましたが、ステップ 3 で異なることを許容していると自分では言っているけれども、本当に許容しているわけではないのですよね。

(竹中) 自分の都合のいいように捉えて許容しているだけです。

—— だとすると、首都圏住民の一番右側と同じように、「お互いに思い込みがある状態」で止まっているかもしれない。

(木村_浩) そう、そこまでかもしれない。報告書を取りまとめているときにもそう思いましたが、そのまま保留しました。これは 2 年目の報告書だから、いろいろこれから分析して行って、最終報告書にすればいいと思っています。今年度の結果も見ても分らないし。

—— ステップ5まで行くのは大変ですね。

(竹中) 難しいですね。そこまでをフォーラムの目的とするのか、フォーラムは「尊重」、すなわちステップ3までを目的とするものですかとしっかり決めるのかは、少し議論しなければいけないところかもしれません。

(木村^浩) 今年度はステップ5までを目標として立てて、これをやっていきたいと思いますと最初に提示する予定です。こういうことまでできるかどうかを試したい、ということも最初に提示して、そのことを意識しながら話し合ってもらおうと、少し違うのではないかと思っています。

それでステップ5までいければいいですし、達成されなければ、「許容」まで含めた「相互理解」まではこの取り組みでできて、ここから先はもっとガンガンやりあうようなコミュニケーションのフェイズです、という結論になるでしょうし。

第1期フォーラムの経験からすると、いきなりステップ5をやれというと、コンフリクトが起こってしまうと思います。第1期は、第4回でかなりコンフリクトが起こりそうな話題を選択しましたが、ちゃんと意見を言い合えた。それはステップ3の効果だと思うのです。そこから先は、その状態での意見交換をどんどん積み重ねていくと、もしかすると達成できるかもしれない。でも、全5回だとその程度が関の山なのかなど。特に、最初に大きなギャップがある状態から始めますので。

では、最後まで説明したいと思います。インタビューの分析と、コミュニケーションが取れるようになるまでのプロセスという仮説を受けて、フォーラムの再設計をしています。フォーラムをコミュニケーションができるようになるための仕組みとして成立させたいということは、この5項目が要件に入るでしょうということ。さらには、そもそもフォーラムという仕組みが成立するためには、29ページに挙げられている項目も達成しないと、参加者が参加してくれませんねということで、合わせて10項目を挙げています。

それに従ってフォーラムの要件を整理したものが、32、33ページの表になります。例えば、グループワークの際にはどんなことに気をつけなければならないのか。対話という全てに関わる要素に対して、どういうことを考えなければならないのか。そのルールはどうなっているのか。ファシリテーターはどうすべきか。それを支援する側はどういうことに気をつけなければならないのか。それらを整理して、表にまとめています。

以上を第1回フォーラムに反映させるべく、現在具体的な設計をしているところです。

なお、今年度は、31ページにあるように、5月31日から始まって、7月26日までの隔週の土曜日、昨年度と同じ時間帯で、全5回のフォーラムを実施する予定です。

ということで、最後は駆け足になってしまいましたが、ここまでで何かございますか？

—— 「コミュニケーションが取れる状態になるまでのプロセス」は、1から5までステップ順に達成していくというものなののでしょうか？ 先ほど、北村先生のは4と5が逆という話もありましたが、逆に言えば、5が最初になかったら当然1も2もないとか、そんな考え方もできると思うのですが。

(木村^浩) 4と5は、一緒に達成される場合もあるし、片方しか達成されない場合もあるので、もしかしたら、星取表みたいな形にしたほうがいいのかもかもしれません。

ただ、点線で区切ってある部分は、大きなステップだと思うのです。フォーラム前の「思い込みがある状態」から、ステップ1～3の尊重に関わる段階への移動、さらにステップ4、5のコミュニケーションが取れる状態への移動は、大きなステップでしょう。ただ、その中の達成ポイントは、星取表みたいな形で表現したほうがいいのかもかもしれません。

ただ、認識論はある程度マルバツで議論ができるのですけれども、許容する、あるいは、自分が変わるというのは程度論なので、下側に配置してしまっているというところがあります。

ということで、必ずしも順番を表したものではないので、箇条書きのほうがいいのかもかもしれません。

—— ステップ1～3がすでにできている人でも、テーマによって、ステップ4、5ができるかどうか変わってきますよね。例えば、原子カムラというテーマだったら非常に難しいけれども、もっと身近な社会福祉みたいなテーマだったら、意外とすんなりできるかもしれない。

(木村^浩) そうですね。参加者から、「こういうことが目的だったら、原子力ではない話もしませんか」という提案が出てきてくれるとありがたいなとは思っています。

—— 原子力だとどうしても両極の話になりがちですけれども、誰でも共通するような話題だったら、意外とすんなりとできる可能性もありますよね。

(木村^浩) ただ、その場合、情報の多い、少ないという差がリセットされてしまうので、それでコミュニケーションの成立可能性を見ても、あまり意味がないかもしれません。

原子力だとあまりに差がありすぎるので、例えばその周辺領域、エネルギーに関して試してみましようとか、そういうことができればいいなと思っているのですけれども。ただ、運営側が強制的にセットしてはいけないので、その辺は実際に進めながら様子を見ることになると思います。

—— 最初に「コミュニケーションが取れるようになるまでのステップ」を示したときに、参加者の中からそういう意見が出てくるといいわけですね。

(木村^浩) ええ。そういう意見が出てきたら、では、そういうテーマも試してみまじょうか、とできる可能性がある。この枠組みだと、いきなりそれをこちらから言うのはすごく難しい。違う枠組みならまた別だと思うのですけどね。

ということで、30分ほどオーバーしましたがけれども、現在の分析状況をご紹介しました。今回の分析は、まだまだ満足のものではありません。特に、インタビューで聞き取れていないところがあったりするので、第2期では、コミュニケーションのプロセスを分析できるようなインタビューガイド、何を聞いたらどのポイントがちゃんと返ってくるのかというところも整理しながらやっっていこうと思っています。おそらく、第2回の全体会合のときに、皆さんにご相談することになると思いますので、よろしくお願ひします。

—— 最後に一点よろしいでしょうか。メンバー表なのですけれども、この手の取り組みで日本の最先端を走っているのは大阪大学だと思うので、例えば第一人者である小林さん、平川さん、あるいは若林さんや三上さん、あるいはもう少し毛色が薄くなって、北村さん、八木さんでもいいのですけれども、そういったトップグループの人たちを外部評価なり、あるいはアドバイザーとして、メンバーに組み込んではいかがでしょうか。

(木村^浩) 平川さんはイニシアティブ全体の評価委員なので、必然的にそういう場で私たちは話し、評価を得ているのです。今回のシステム化についてもそこで相談し、ディスカッションをして、非常にいいことなのでぜひやってほしいというコメントをいただいています。

—— そうなのですか。分かりました。

(木村^浩) でも、例えば森田先生に改めてお願いして駄目だった場合、小林先生にお願いするというのはいい手だと思いますので、考えてみたいと思います。

他はよろしいでしょうか。では、第1回の業務推進全体会合はここまでとしたいと思います。どうもありがとうございました。

以上